



Title	農村青年の現状と社会教育の課題について
Author(s)	藤田, 昇治
Citation	北海道大学教育学部社会教育研究室報, 1975, 60-61
Issue Date	1976-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28574
Type	bulletin (article)
File Information	1975_P60-61.pdf



[Instructions for use](#)

農村青年の現状と社会教育の課題について

大学院修士課程 藤田昇治

現在、基本法農政の展開の下で、広範に農業破壊、農村の荒廃という状況が作り出されている。急激な農家戸数の減少、農業従事者数の減少、労働力の高齢化・婦人化、農地の潰廃等々の問題が一段と激化してきている。そして農業・農民問題は極めて多様な形態であらわれてきている。

このような中で、農村青年をめぐる問題も複雑に生じてきている。農業経営の展望の喪失を基本に後継者不足・嫁不足等々の問題が社会問題として深刻に論じられている。

社会教育の領域でも、青年の脱農・兼業化にともなって、既存の社会教育関係団体の停滞ないし崩壊状況があらわれている。それとともに、社会教育関係団体を基盤として展開されてきた様々な活動の停滞が生じてきている。

しかし、社会教育（いわゆる公的社会教育）の側からとらえた農村青年の問題状況は、極めて一面的・表面的に把握され、結果として否定的にとらえられているようだ。価値観の多様化、モータリゼーションの普及、都市的生活様式の普及などによって、青年の動向が、とらえにくくなり、青年団への組織化も困難になっている傾向は確かに存在している。しかしながら、そこでとどまっている限り、青年の真の要求をとらえることも、どのように働きかけて行ったら良いのかを明らかにすることもできないだろう。

青年の意識が多様化している、といいつながら、青年団活動などは、レクリエーション・奉仕活動等ともすると既存の活動のワクの中だけで追求されがちである。しかも参加者が多数になるものを中心に取組むという傾向が一般的ではないだろうか。そこではどうしても青年自身の中に物足りなさが見い出され、青年団としての活動がマンネリ化ないし停滞するという傾向が見い出される。

また、青年団という組織形態から、サークル・グループ活動へと、機能別に分化する傾向も存在している。しかし、ともするとサークル・グループは生成・消滅を繰り返し、活動が進展しているとは言い切れない。また、機能分化的進行と青年団活動の総体としての発展とが二律背反になる傾向も克服されていない。したがって、青年の諸活動を社会教育の課題としてとらえ直す場合には、単に活動形態で判断するのではなく、活動の質的側面に深く立ち入っていくことが重要であるといえよう。

さて一方では以上のような青年の状況が見い出されるが、他方では、社会教育行政の側でとらえられていない、青年の自主的な諸活動、新しい方向性をもった各種の実践活動が見い出される。

例えば学習活動としてみても、各地で展開されている労農学習運動においては、極めて質の高い学習が追求され、そこでの青年の活躍がみられる。労農提携という方向性は持っていないにしても、小さな集団で営農をとりまく諸問題を学習していこうとする動きは数多く見い出される。そこでの学習は、生産力発展をめざす技術的学習から、農業経営を出発点として政治・経済のしくみを学習していく、というように多様な形態で展開されている。

さらに、学習活動を基礎としながら、農業経営安定のための様々な努力がなされている。例えば共同経営の試み。一方では構造改善事業の一貫として「上からの」組織化があるが、他方で気の

合う仲間同志で自主的に共同化していこうとする努力がある。また、複合経営によって生産力の発展、経済力の充実を志向する努力も行なわれている。さらに生産過程での努力のほか、流通過程において、生活協同組合と連携して「産直」を行なうなど、様々な努力が行なわれている。ここで注目したいのは、以上のような様々な努力が、単に個別経営の安定をめざすというだけでなく、地域の農業発展の展望を切り拓く方向性をも持っていることである。

以上のような状況判断から、今後の、社会教育としての課題を整理していくいくつかの視点を挙げてみたい。

第一に、農村青年教育を考えていく上で、なによりも教育課題の設定にあたって地域の生活課題を正確に把握し、その上で青年の教育要求を方向づけることが重要である。とかく青年の意識状況・動向については表面的・現象面的に把握されがちである。しかし、あくまでも生活課題から出発し、その問題を掘り下げる基本視角として高度経済成長下の農業破壊、国独資下の農業・農民問題ということ据えなければならない。つまり、独占資本と農民との対抗関係という視点である。それと同時に、農民層分解からくる農民層内部の矛盾や、農村社会に根強く残存している保守性といったことも正しく位置づけられる必要がある。

第二に、第一の課題とも関わって、農村青年教育の位置づけを行なう上で、農民教育という一般性と、青年期教育という特殊性とを統一する視点が重要である。とかく青年期教育の在り方という視点からのアプローチになりがちであるが、基本的方向としては、生産・生活の場で生じている諸問題から出発することが重要だと思う。この視点が欠落している限り、青年団活動等農村青年教育の停滞状況の真の問題状況を把握すること、従って実践的に問題を克服していくことはできないだろう。

第三に、教育・学習課題を設定していく上では、生産力発展をめざす農民の要求、生産・営農意欲を基礎とした新しい生産技術体系の学習と、農家経営をとりまく諸条件の学習——流通・価格問題、農政、地域開発等々について——とが統一的に追求される必要がある。この点では何よりも信濃生産大学を出発点とする各地の農民大学・労農学習運動の成果に多くの教訓が示されているように思う。

第四に、農村の生産構造・生活問題をとらえ直していく中で、農協や実行組合などの農民組織の位置づけも、それぞれの活動内容、状況に即して行なう必要がある。また、農林行政や農業改良普及所との関係では行政セクショナリズムの弊害が大きいのが、農民の生産・生活要求を出発点として問題をとらえ直し、克服していくことが求められている。

農村青年の問題状況は、地域によって具体的なあらわれ方は多様であり、社会教育の課題を整理すること自体が極めて困難ではあるが、以上述べた視点をふまえて、今後具体的に地域の生産・生活上の諸問題を構造的に明らかにする中で、教育的課題を設定することが可能となるであろう。